

東京大学弥生講堂アネックス

正会員 河野泰治君

本建物は東京大学農学部の本郷通り沿いにあり、8個の木質HPシェルによって構成されたギャラリーと、同じく木造の研究棟からなる。図面や写真からはその奇異な形態が強調され、いわゆる建築としての外部や内部の空間に果たして共感を感じられるのか、内心不安を感じながらの現地審査であった。しかしこの先入観は良い意味で裏切られることになった。

本郷通りの喧騒から大学構内に入ると、比較的大きな樹木の中にこの建物はひっそりと建ち、意外なことにあまり存在を主張していない。HPシェルの繰り返しは建物全体のボリュームを分節化し、外壁から屋根へと続く銅板縦平葺きのこのシェルの曲面は、むしろ住宅建築に近いスケールを感じさせる。その形態にまったく違和感はない。

内部空間も思ったより小さく感じられ、心地よいスケールでまとまっている。写真からは、連続するHPシェルがゴシック様式の聖堂のイメージを与え、多少圧迫感のある空間を想像していたが、これもまたよい意味で裏切られた。このシェル以外の壁面や屋根面は大部分がガラスで、外部の樹木が眺められ、陽光が降り注ぎ、半屋外のような明るい空間となっている。またそのことにより個々のHPシェルがくっきりと浮かび上がり、その木板張りの曲面の連続は、木漏れ日が降り注ぐ明るい森の中に迷い込んだような印象を受ける。

この建物を見て、その外部や内部の空間が実際よりも小さく感じられ、住宅建築のような印象を受けた理由のひとつには、手作りを感じさせる丁寧な収まりが至る所にあり、設計者によるきめ細やかなディテールの検討が感じられたことがある。この建物には、実現するために多くの困難を克服しなければならない難易度の高さがありながら、安易な方法に流れることなくひとつひとつ真摯に解決して、新しい木質構造の可能性を示そうという関係者の姿が窺える。

そもそもHPシェルは3次元の中で厚みのないものとして座標が与えられるもので、これを具現化するためには膜や薄肉RCスラブ等、なるべく薄い材料が適している。それを木造で構造用合板の格子状のウェブに同じく構造用合板のフランジを組合せ、面外の曲げ剛性と曲げ耐力を持たせて構造材とするのであるから、その安全性や施工性の確認は困難を極める。さらに厚みを持つ曲面のポイントや寸法の押え方、仕上げ材や建具の取付けディテール等は、机上の検討では到底成しえないものである。これらを解決するため、設計者は木質HPシェルの構造用合板を面要素とし、ビス1本ずつを剪断バネとする解析をし、これを検証する実験をし、さらに原寸試作までして検討を加えている。

本建物は、あえて困難な高い目標を掲げ、これに果敢に取り組み実現したもので、その完成度とともに完成までの過程も含め、あらためて設計とは何かを問いかける作品である。よって、ここに日本建築学会作品選奨を贈るものである。